

## 若菜、音韻学を学ぶ(1)

中村雅之

### 1. 新学期はじまる

若菜は4月から地元の大学の外国語学部の1年生になった。入学式の二日後から授業が始まったが、必修科目と第2外国語だけで毎日の午前中はほぼ埋まってしまう。中国語専攻の若菜の場合、中国語が第1外国語となるので、第2外国語は英語でもよいのだが、フランス語に決めた。英語は高校時代にかなり頑張ったので、今はなるべく多くの言語に触れたかった。本当は朝鮮語にしようと思っていたのだが、朝鮮語は第2外国語のリストに入っておらず、インドネシア語やラテン語などと同列に「諸言語研究」という週に1度だけの自由選択科目という扱いだっただ。時間割をあれこれ調整して、朝鮮語も受講することにした。

若菜はこれまでに、中国語・ロシア語・ドイツ語の学習経験がある。すべてラジオ講座と文法書を使っての独学だ。ドイツ語はまだ半年だけなので、復習も兼ねて第2外国語をドイツ語にしようかとも思ったのだが、ラテン語にも興味があるので、フランス語にした。高校時代の国語教師で言語オタクでもある葵(あおい)先生が、ラテン語をやる前にフランス語かスペイン語をやった方がよいと言ったのだ。何でも、フランス語やスペイン語は気が遠くなるくらい動詞の活用を覚えなければならないらしい。数え方にもよるが、直説法だけでも8種の時制があって、他に条件法・接続法・命令法があるというのだから、聞いただけでも武者ぶるいしてしまう。

そして、若菜は高3の冬から、隋唐代の中国語の発音である中古音の勉強もしている。葵先生の大学時代の指導教官だった人が町外れで悠々自適の生活をしているので、葵先生に紹介してもらって、日曜ごとに教を乞うているのだ。‘仙人’というあだ名の老先生の話聞くのは、最近の若菜の何よりの楽しみなのである。

入学式やら何やらで、勉強会は最近中断していたが、明日から再開する予定になっている。時は春、桜餅でも買っていこう。

### 2. 直音4等

翌日、仙人宅を訪れた。桜餅を差し出すと、目じりを下げて、いいなあ、季節だなあ、と喜んでくれた。これまでも、芋ようかん、落雁、月餅などを美味しそうに食べるのを見ていたから、若菜は思わず、ふふっと微笑んだ。ほうじ茶で頂く桜餅は美味しかった。

「大学の授業はどうだね」

「授業が始まって二週目なので、まだ何とも言えませんが、フランス語は面白いです。綴りと発音は英語よりもずっと規則的ですし、声に出して読んでも爽快感があります」



「分かりました。例に挙げられた愆と牽のカーलगレンの再構音ですが、何だかとても微妙な違いですね」

「うむ。何しろ、ほとんどの現代方言で区別がないのだから仕方がない。カーलगレンとしては苦肉の策だな。3等よりも4等の主母音の方が狭いと考えるのは、韻図の配置から見てそれほど無理な推定ではない。まあ、実際にこれらを耳で聞いて区別できるのかという問題はありますが、理論的な産物としては穏当と言えるかも知れない」

「4等韻が直音だという説はいつ頃、どのような根拠で出て来るのですか？」

「1930年代の終わりに俄かに唱えられるようになった。根拠は反切だ。大まかな傾向として、切韻・広韻の反切では直音には直音の反切上字、拗音には拗音の反切上字が用いられることが多い。上の例で見ると、3等韻の愆は去乾切で、拗音の去が上字に使われているが、4等韻の牽では苦堅切とあって、1等の苦が上字に使われている。つまり、直音の苦が反切上字であるからには、4等韻そのものが直音なのではないか、という訳だ」

「なるほど。これは全ての4等韻に当てはまるのですか」

「うむ、そう思ってよい。今では、4等韻直音説はほとんどの研究者に認められている」

「3等韻と4等韻で反切上字が異なることにカーलगレンは気付かなかったのでしょうか？」

「もちろん気付いていた。それを声母の違いによるものと考えたのだ。3等韻で拗音の上字を持つものはkj-/pj-のように口蓋化した声母で、直音の上字を持つ4等韻は口蓋化していない普通のk-/p-だという訳だ。」

「でも上の例では、3等韻の愆も *k'jän* で普通のk'-になっています」

「うむ。1922年の論文“The reconstruction of Ancient Chinese”までは *k'jjan* のように口蓋化声母であることを明確に表記していたのだが、1923年の *Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese* からは-j-を省くことにしたのだ。したがって、上のGSRでも *k'jän* のように記される訳だ」

「どうして-j-を書かないことにしたのですか？」

「3等韻の介音をカーलगレンは子音的な-j-として、4等韻の介音を母音的な-i-とした。つまり、介音が-j-であれば、声母は自動的に口蓋化していることになるので、-j-を省いても構わないという判断だ。もっとも、カーलगレンのj化声母説は他の研究者には不評だったので、そのマークが消えて、むしろ使いやすくなったと言えるかも知れない」

「なるほど。カーलगレンとしては、現代諸方言で区別のない3等韻と4等韻を、介音の微妙な違いと主母音の広狭でなんとか区別したという訳ですね。しかしその後、4等韻直音説が出てきて、趨勢はそちらになびいた」

「そういうことだ」

「いずれにしても、唐代に入ると4等韻は拗音に変わるのですね」

「うむ。唐代後期の反切では4等韻は3等韻に合流している。厳密には、3等韻の一部に合流する」

「一部というのは？」

「4等韻は3等韻の4等と合流したのだ」

「3等韻の……4等??？」

### 3. 3等韻の配置——3つのタイプ

「用語を確認しておこう。韻図で1等欄に配置される韻を1等韻という。2等に配されるのが2等韻、4等に配されるのが4等韻だ。これらは問題ない。その他が3等韻になるのだが、3等韻は時として2等や4等にもはみ出して記される」

「あ、前にも少しその話は聞きました」

「うむ。3等韻には3つのタイプがある。」

①3等にのみ配される。

②歯音の2等と4等、さらに喉音の次濁音(=喻母)の4等にも配される。

③それに加えて唇音・牙音・喉音の4等にも配される。

このうち、①と②のタイプには軽唇音化が生じる。ただし、蒸韻は例外で、配置上は②のタイプだが、軽唇音化を生じない。そして、4等韻が合流するのは③タイプの3等韻だ。その中の4等に配された部分に4等韻が合流するということだ。図に示した方が分かりやすいだろうから、③の配置図と4等韻の配置図を並べてみよう。そうすると、左右の図を重ねてみれば、どの部分が合流したか、一目瞭然だ。◎の部分は4等韻のみにある」

③タイプの3等韻の配置

	日	來	喉	齒	牙	舌	唇
1等							
2等				○			
3等	○	○	○	○	○	○	○
4等			○	○	○		○

4等韻の配置

	日	來	喉	齒	牙	舌	唇
1等							
2等							
3等							
4等		◎	○	○	○	◎	○

「雰囲気は分かりました。先ほど、①と②のタイプの3等韻には軽唇音化が生じると仰いました。つまり①と②は中舌・後舌の主母音を持っていたということですね。逆に、軽唇音化を生じなかった③タイプは前舌の主母音を持っていたこととなります。4等韻も前舌主母音を持っていたので唐代に拗音化して、③の3等韻の4等字に合流した。理屈は通っているように思います。何か具体的な例を挙げてもらえませんか」

「そうだなあ、例えば、③タイプの獮韻(仙韻上声)には唇音の幫母3等に‘辨’があって、幫母4等に‘編’がある。そして4等韻の銑韻(先韻上声)幫母には‘編’がある。

4等韻の銑韻が3等韻の獮韻に合流した結果、唐代には4等同士の編と編が同音になる。平山久雄(1967)「中古漢語の音韻」の音価表によって音価を当てはめてみると、次のようになる。韻鏡の該当箇所も挙げておこう」

(韻鏡 23 轉) 獮韻幫母 3 等「辨」 [piɛn]

(韻鏡 21 轉) 獮韻幫母 4 等「編」 [piɛn]

(韻鏡 23 轉) 銑韻幫母 4 等「編」 [pen] > 唐代には [piɛn] (=「編」)

	齒音		舌音		喉音		齒音		齒音	
	清	濁	清	濁	清	濁	清	濁	清	濁
山元仙	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
産阮獮	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
獮願線	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
鎔月薛	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

  

	牙音		舌音		唇音	
	清	濁	清	濁	清	濁
訃言	○	○	○	○	○	○
眼言	○	○	○	○	○	○
嚙	○	○	○	○	○	○
聒	○	○	○	○	○	○

	齒音		舌音		喉音		齒音		齒音	
	清	濁	清	濁	清	濁	清	濁	清	濁
寒刪仙先	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
早潜獮銑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
翰諫線霰	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
曷黠薛屑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

  

	牙音		舌音		唇音	
	清	濁	清	濁	清	濁
駢顏妍研	○	○	○	○	○	○
斷齟齬	○	○	○	○	○	○
岸鴈彦硯	○	○	○	○	○	○
孽孽	○	○	○	○	○	○

「韻鏡が作られた時代には、銑韻の‘編’はすでには拗音の[piɛn]になっていたもので、4等に配されたということですね。カールグレンの再構音を仮に後期中古音のものとするれば、大きく外れていないことになります」

「そうとも言い切れない。実はカールグレンは③タイプの3等韻の3等字と4等字を区別せずに全くの同音と見なした。上の例だと辨と編を区別しなかった」

「つまり、辨も編も *piän* なのですね。現代音で区別がないのだから、当然の処置とも言えそうですが、韻鏡で違う位置を占めているということは、広韻でも違う小韻だということです。つまり、中古音では区別があったはずだと考えられる」

「その通りだ」

#### 4. 重紐

「なんだか、複雑なパズルのようです。現代音で区別のない‘辨・編・編’、つまり3等韻の3等と4等、そして4等韻、このパズルはどのようにして解き明かされたのですか？」

「これら全ての謎を解いたのは、有坂秀世(ありさかひでよ、1908-1952)という学者だ。1937年から1939年にかけて4回にわたって発表された「カールグレン氏の拗音説を評す(一)～(四)」は、中古音研究のレベルを一挙に引き上げた記念碑的な論文と言ってよい」

「カールグレンの著作の漢訳本『中国音韻学研究』が出たのが1940年でした。ということは、有坂秀世はフランス語の原著を読んだということですね」

「もちろんだ。1908年生まれの有坂は旧制高校では‘文乙’というドイツ語専修のクラスにいたのだから、フランス語は独学か大学に入ってからやったのだろうな。そして29～30歳の時にカールグレンの説を修正する論文を書いた。もっとも、カールグレンの拗音説についての議論はすでに『上代音韻攷』において始まっている。この本の原稿は没後に発見されて、1955年に出版されたが、実際の執筆は1933年頃というから、すでに25歳の時にはこの問題を論じていたことになる。カールグレンの著作 *Études sur la phonologie chinoise* が出版されたのが1926年だから、おそらくこれを大学時代に読んだのだろう。そして卒業後はすぐに療養生活に入る」

「療養生活ですか？」

「高校時代に肺結核を患って、その後の人生の大半を病床で過ごしたのだ」

「その状態で論文を書いたのですか？」

「うむ、しかも大量にだ。次から次と独創的な学説を出し続けて、43歳で亡くなった」

「ふうー。フランス語の動詞の活用なんかで音を上げてはいけませんね。身の引き締まる思いです」

「よし、それでは「カールグレン氏の拗音説を評す」の概略を説明しよう。まず、カールグレンが3等韻に子音的な拗介音 *-j-* を、4等韻に母音的な拗介音 *-i-* を設定したことについて、有坂は論文を書き始めた当初は容認していた。上記論文(一)を書いた1937年の段階では、‘ $\alpha$ ,  $\beta$  の consonantique に對する  $\gamma$  の vocalique といふ、この結論に對しては、私は特に反對すべき理由を持たない’ と述べている。カールグレンの分類による  $\alpha$  とは上で述べた②と③のタイプの3等韻で、 $\beta$  は①タイプ、そして  $\gamma$  が4等韻だ」

「つまり、3等韻の介音が子音的 (consonantique) で、4等韻の介音が母音的 (vocalique)

であると。ここはカールグレンの使ったフランス語の用語をそのまま出して説明しているのですね」

「うむ。カールグレンは、朝鮮漢字音で山撰 3 等韻が -ən、4 等韻が -iən となることを根拠としていた。例えば、前に挙げた仙韻 3 等 ‘愆’ は kən で、先韻 4 等 ‘牽’ は kiən だ。しかし有坂は、朝鮮音でも 3 等韻のうち 4 等に位置する字（‘遣’ など）は -iən となることを示して、カールグレンがこれを無視したことを批判したのだ。現代主要方言で区別のないこの 3 等韻の 3 等と 4 等の対立を、今では ‘重紐（ジュウチュウ）’ と呼んでいる。有坂はこの重紐の区別がどこにあったかを、日本・朝鮮・ベトナムの漢字音、そして南方の一部の方言などを根拠として、3 等の介音に中舌の -j- を、4 等の介音に前舌の -i- を再構した。今では重紐の 3 等を B 類、4 等を A 類と称するのが一般的だ。まとめると、以下の如くだ」

重紐 B 類（3 等韻の 3 等字）：介音は中舌の -j-

重紐 A 類（3 等韻の 4 等字）：介音は前舌の -i-

「少し平山久雄の再構音に近づいて来ました」

「そうだな。有坂説は日本ではほぼ定説になっている。ただし、B 類を全くの中舌とする発音しにくいので、平山久雄は [ɹ] に修正したが、本質的な違いはない。言い忘れたが、重紐が存在するのは唇音・牙音・喉音だけで、舌音・歯音にはない。これも覚えておいてくれ」

「あの、重紐という言葉はどういう意味で名付けられたのでしょうか？重い紐（ひも）でも重なった紐でもないとは思いますが」

「重紐という用語は中国で作られたもので、紐とは小韻のことだ。つまり、広韻において、一見すると同音に見える小韻のペア、つまりダブって登録されているように見える小韻の対を重紐と呼んだのだ。この用語が生まれたのは 1944 年頃だが、陸志韋は 1939 年の論文で ‘重出小韻’ と表現している。小韻を紐とも言うので重出小韻を縮めて重紐としたのだろう」

「‘紐’ がどうして小韻を意味することになったのでしょうか？」

「おそらく ‘紐（ひも）づけられたもの’ ということではないかな。共通の特徴で括られたグループのことを紐と呼ぶのだろう。王国維（おうこくい、1877-1927）が切韻残巻の解説を書いた時に、小韻を紐と称したので、それ以降、中国では紐という語が広まったようだ。もっとも、清代にすでに銭大昕（せんたいきん、1728-1804）が『十駕齋養新録』の中で ‘廣韻祇岐同紐，正用江南音’（広韻で祇と岐が同じ小韻なのは、まさに江南音を用いたものだ）と言っているから、小韻を紐と呼ぶことにはそれなりの歴史がある」

「なるほど。重紐とは重出小韻のことなのですね」

「有坂は論文の中で、広韻にある重出小韻を 69 組提示しているが、このリストには多少の漏れがある。いずれにせよ、それらの対は現代の主要方言では同音になるのだが、日本・朝鮮・ベトナムの漢字音には部分的に対立を示す例があり、また福建省や広東省の一部の方言にも僅かに対立例があることを示した。今の習慣に従って、重紐の対立を持つ③タイプの

3等韻の3等をB類、4等をA類、そして重紐の対立を持たない韻(①と②のタイプ)の3等をC類として整理すると、以下の如くだ

1) 朝鮮漢字音～牙喉音字にのみ対立がある。

山摂:[A類] kiən [B類・C類] kən

止摂:[A類] ki [B類・C類] k̄i

臻摂:[A類] kin [B類・C類] k̄in または kən

2) ベトナム漢字音～唇音字にのみ対立がある。

A類字では「卑 ti」「標 tieu」のように舌音化が見られるが、B類では「皮 bi」「表 bieu」のように唇音を保っている。(C類は軽唇音化)

3) 日本呉音～臻摂牙喉音において

A類はイン(イチ・イツ)型に、B類・C類はオン(オツ)型になる。

4) 福州音～臻摂牙喉音において

[A類] king [B類・C類] k̄ung または k̄öung のような対立がある。

5) 汕頭音～臻摂牙喉音において、[A類] kin [B類・C類] k̄in という対立がある。

「日本の呉音にも対立例があるのですね」

「うむ。一番はっきりしているのは入声質韻の3等(B類)‘乙’(オツ)と4等(A類)‘一’(イチ)だな。韻鏡でもきれいに3等と4等に並んでいる。直接のペアではないが、上声隱韻3等(C類)の‘隱’(オン)と平声真韻4等(A類)の‘因’(イン)なども参考になる」

「現代の主要方言にはA類とB・C類の対立がほとんどないのに、外国漢字音には結構違いが確認できますね」

「それらの資料を根拠として、B・C類の介音を中舌の-*i*-、A類の介音を-*i*-とした。これが「カールグレン氏の拗音説を評す(三)」(1938年7月)までの結論だ。この段階では4等韻にはまだカールグレンの-*i*-を認めていた。ところが1年後の「カールグレン氏の拗音説を評す(四)」(1939年7月)に至って、4等韻が直音ではないかという説を提唱し、これが今は定説となった。有坂の「カールグレン氏の拗音説を評す」は、その後まとめて論文集『国語音韻史の研究』(1944)に収められるが、その際には論の整合性をはかるために、「カールグレン氏の拗音説を評す(一)」(1937年11月)に記していた‘ $\alpha$ ,  $\beta$  の consonantique に對する  $\gamma$  の vocalique といふ、この結論に對しては、私は特に反對すべき理由を持たない’の部分は削除された」

## 5. 3等韻と4等韻のまとめ

「ここで3等韻と4等韻の全体をまとめておこう。去声しかない廢韻と祭韻以外は、平声の韻で代表させる。再構音価は牙音声母と結合する際の韻母で、平山久雄(1967)のものだ」

3 等韻① (3 等欄にのみ配置。唇音は軽唇音化。戈韻以外は唐代に③タイプに合流)

微韻 -iǎi -yǎi (左が開口、右が合口。以下同じ)

廢韻 -iΛi -yΛi (去声のみ)

欣韻 -iǎn

文韻 -yǎn

元韻 -iΛn -yΛn

戈韻 -ya ('靴' 以外は少数の僻字のみ。唇音なし)

敵韻 -iam

凡韻 -iΛm

3 等韻② (歯音の 2 等と 4 等、喉音喩母 4 等にも配置。蒸韻以外、唇音は軽唇音化)

東韻 -iǎuŋ

鍾韻 -ioŋ

之韻 -iǎi

魚韻 -iə

虞韻 -yu

麻韻 -ia (歯音・喩母・日母のみ。主母音は前舌)

陽韻 -iaŋ -yaŋ

尤韻 -iǎu

蒸韻 -iǎŋ// -iǎŋ (平山は重紐 B 類と C 類を含むとする)

3 等韻③ (唇音・牙音・喉音の 4 等欄にも配置。重紐あり。軽唇音化しない)

支韻 -iě/-iě -yě/-yě (スラッシュの左が B 類、右が A 類)

脂韻 -ii/-i -yi/-yi

祭韻 -iei/-iei -yei/-yei (去声のみ)

臻・真韻 -iǎn/-iǎn -yǎn

諄韻 -yǎn

(臻・真・諄韻は相補分布をなす。臻韻は歯音 2 等のみ。真韻は重紐開口 A 類・B 類、  
合口 B 類。諄韻は合口 A 類)

仙韻 -ien/-ien -yen/-yen

宵韻 -ieu/-ieu

庚韻 -iaŋ -yaŋ (清韻と併せて重紐のような対立をなす)

清韻 -ieŋ -yeŋ

幽韻 -iǎu/-iǎu (唇音 B 類を 4 等欄に配置。尤韻唇音と重なるため)

侵韻 -iǎm/-iǎm

塩韻 -iem /-iem

#### 4 等韻

齊韻 -ei -uei

先韻 -en -uen

蕭韻 -eu

青韻 -ej -uej

添韻 -em

「以上の音価は平山久雄（1967）「中古漢語の音韻」に拠ったものだが、平山はその後、自身の推定音価に何度か修正を加えている。しかし、決定的な違いはないので、今は平山（1967）に従っておく」

「気になる点がいくつかあります。まず、3等韻の合口介音ですが、先生の‘ざっくり中古音’では-iu-/-iu-のようだったと思いますが、平山式は-y-/-y-なのですね」

「うむ。それはどちらでもよい。実際、中古音でどうだったかはよく分からないのだ。現代音でも‘雄’が [ciuŋ] か [ɕyŋ] かは微妙なところだ」

「なるほど。次に、蒸韻がB類とC類の両方を含むという意味がよく分かりません」

「それはかなり複雑な話だし、必ずしも定説ではないので、もう少し後になってから触れることにしよう」

「了解です。それから、重紐のA類かB類かを条件として韻を分けているものがありますね。真韻と諄韻、そして庚韻と清韻です」

「真韻と諄韻に関しては、実は原本切韻では区別されておらず、ある時期から分けられるようになった。その条件が少し変わっていて、合口のA類だけを諄韻としている。開口ではA類もB類も真韻に含まれている」

「どうして、そんなことになったのでしょうか？」

「平山久雄は「切韻の例外的反切の理解について」（1962）という論文で、それぞれ次のような音を推定している。かなり早い時期のものなので、平山（1967）とは表記が異なるが、考え方は参考になる。

(イ) 開口三等/-iēn/ [-iēn]

(ロ) 開口四等/-iēn/ [-jiēn]

(ハ) 合口三等/-iūen/ [-wiēn]

(ニ) 合口四等/-iūen/ [-jyēn]

合口4等だけが、主母音の前に円唇母音の-y-を伴うので、(ニ)の主母音は精密には [ø] あるいは [y] に近くなり、(イ) (ロ) (ハ)の母音とはニュアンスが違っていたのではないかというのだ」

「主母音が合口A類だけ違っていただけから、韻を分けたということですか？」

「うむ。多少アクロバティックな想定だが、そう考えれば一応の説明はつく」

「ひとつの仮説ということですね。最後に、庚韻と清韻ですが、併せて重紐のような対立

をなすというのは？」

「元は一つの韻だったのが、異なる介音の影響で主母音に差が生じたのではないかということだ。庚韻には2等韻と3等韻があるが、もちろん問題となるのは3等韻だ。庚韻3等はB類の介音、清韻はA類の介音を持つ。庚韻3等は[-iaŋ]だが、清韻は介音の影響で主母音がやや狭くなり、[-ieŋ]となった。普通はそんな風に考えられているようだ」

「根拠はあるのでしょうか？」

「まず、分布が完全に補い合っている。唇音・牙音・喉音について見ると、3等には庚韻のみ、4等には清韻のみだ。そして、切韻より前の韻書ではこれらを一つの韻としているものがあつた。現存する王仁响の刊謬補缺切韻の韻目にはいろいろな注釈が付いている。例えば、梗韻（庚韻の上声）には‘夏侯与靖同、呂別、今依呂’と記されている。夏侯は『韻略』という韻書を作つた夏侯詠、呂は『韻集』を作つた呂静のことで、靖は韻目だが、広韻の静韻（清韻の上声）にあたる。つまり、この注釈の意味は、夏侯詠『韻略』では梗韻と靖（=静）韻を同じ韻にしているが、呂静『韻集』では分けているので、今は呂静に従う、ということだ」

「この注釈が原本切韻にもあつたとすると、切韻編纂の際に、庚韻と清韻（の上声）を区別するかどうかを、旧来の韻書を参考にして検討したということですね」

「去声の敬韻（庚韻の去声、広韻の映韻）にも‘呂与諍同勁徑並同、夏侯与勁同、与諍徑別、今並別’とある【同は衍字】。つまり、呂静『韻集』では敬（=映）韻を諍韻（耕韻の去声）・勁韻（清韻の去声）・徑韻（青韻の去声、4等韻）と同じ韻にしている。夏侯詠『韻略』では敬（=映）韻を勁韻と同じにしているが、諍韻・徑韻とは分けている。今はすべて分けることにする、ということだ」

「何やら複雑ですが、夏侯詠が庚韻と清韻（の去声）を区別しないのは、上声と同じです」

「さらに、ある写本によれば、入声昔韻（清韻の入声）にも注釈があつたようだが、ほとんど見えない。確認できるのは、‘……陌……’という一字だけだ。しかし、これだけでも、昔韻と陌韻（清韻と庚韻の入声）を区別していない韻書があつたのだろうと想像がつく」

「平声の庚韻には注釈はないのですか？」

「ない。最初からなかったのか、現存写本で抜けているだけなのかは不明だ。だが、上声や去声で区別していないのに、平声だけ区別したとも考えにくいので、夏侯詠『韻略』ではおそらく庚韻と清韻を全ての声調で一つの韻としていたのだろう。その段階では一つの韻の中に-iaŋ/-ieŋが重紐としてあつたのではないかという訳だ」

「ははア、そして、A類の方が-iaŋ>-ieŋという変化を経て、清韻として独立したと。介音が主母音に影響を及ぼして音を変えることが、清韻にも諍韻にも起こつたのだろうということですね」

「そういうことだ。3等韻は何かと面倒だが、重紐の研究と言うのは特に日本で発達したと言ってもよいものだ。一通り知っておくのもいいだろう。今日はこれまでだ。次回は3等韻をもう少し細かく見ることにしよう。今はまだ忙しいだろうから、しばらく宿題はなしだ」

「はい。お気遣いいただき、ありがとうございます」

## 6. 小さい問題

次の土曜日、若菜は本屋にいた。隣の喫茶店で葵先生と待ち合わせをしているのだが、少し時間があるので、語学コーナーでフランス語や朝鮮語の文法書を眺めていた。

大学の授業も3週目に入り、リズムが掴めてきたので、先月まで続けていた各言語のラジオ講座をまた聴き始めた。ロシア語とドイツ語は初級編に加えて応用編も聴いている。ところが、中国語には応用編がない。他の講座は月火水が初級編、木金が応用編という構成なのだが、中国語と朝鮮語は月から金まで連続した講座なのだ。

朝鮮語はゼロからやるので、若菜にとっては週5日連続の講座なのは都合がよい。問題は中国語だ。若菜は中国語講座を高2の秋から聴いているから、すでに3週している。今年の講座は入門を終えた人を対象とするという触れ込みだったから期待したが、聴いてみたらかなり退屈な内容でがっかりした。どうしたらよいかという相談を葵先生にメールで書いたところ、手持ちの教材をいくつかあげるから土曜日に会おうということになった。なんでも2年前まではラジオでも「ステップアップ中国語」と言う中級の講座をやっていたのだそう。葵先生はほとんどの言語について、過去10年分の放送を録音してあるらしい。さすが言語オタク！そのMP3ファイルをコピーして呉れるというのだ。そろそろ時間だ、喫茶店に行こう。

注文を終えると、葵先生がいきなり切り出した。

「フランス語をやっているそうね」

「はい、動詞の活用を覚えなくてはいけないので、さっき本屋で文法表を探していたのですけど、良いのがありませんでした」

「フランス語の参考書も何冊か持って来たわ。その中に文法表も入っているから使って。全部あげる」

「うわ、ありがとうございます」

「それと、中国語はとりあえず、2種類持ってきた。一つは2022年に放送されたもので、映画の音声を使用した佐々木勲人先生の講座。もう一つは2019年に放送された、スキットを聴いて表現と文法を鍛える楊凱榮先生の講座。こっちの方がレベル的には若菜にちょうどいいと思う。映画の音声の方は実際のものだから、聴き取りは大変かも知れないけど、音声だけでも情景が浮かぶから楽しい」

「うわー、感謝感謝、助かります。どうして中国語には応用編がないのか理解できません」

「予算がないのでしょう。受信料を払う人が年々減っているから。数年前にはテレビのロシア語講座も廃止になったし。ドイツ語だって、大学での人気のなさを考えると、いつNHKの講座から消えてもおかしくない」

「そっかー。寂しいですね」

「ところで、仙人の所にはまだ通っているの？」

「もちろんです。明日も行きます。先週は3等韻の重紐（ジュウチュウ）と4等韻についてやりました」

「おお、本格的になってきたね」

「わたし、重紐という言葉は‘重い紐（ひも）’とか‘重なる紐’じゃないですよ、ってバカな質問をしてしまいました」

「それはバカな質問ではないわ。そもそも日本では重紐の紐とは何か、ということが真剣に考えられてこなかった」

「そうなのですか？でも仙人は紐が小韻のことだとアッサリと言っていましたけど」

「それは仙人がきちんと調べた結果よ。仙人もどうして‘重なる紐（ひも）’がA類とB類の対立を意味するのか、本気で疑問に思ったわけ」

「すると、紐（チュウ）が小韻だという認識は一般的ではないということですか？」

「少なくとも、日本ではね。例えば、平山久雄（1967）「中古漢語の音韻」にはこんな説明がある」と言って、バッグから『中国文化叢書 1 言語』を取り出して、開いて見せた。

このような pair は、反切系聯の結果では下字が系聯してしまうことが少なくない。その場合には、同一声母が同一韻母と重複して結合している観を呈する。声母を<紐>ともいうので、したがって<重紐>と呼ぶのである。（149 頁）

「これだけではない。『中国語学辞典』にはこうある」

《切韻》《広韻》平声の支・脂・祭・真（《広韻》では諄も）・仙・宵・侵・塩の各韻（および相配する上去入声、後も同じ）には唇音・牙喉音の小韻が開合による区別の他に更に重複して現れ、声母を「紐」ともいうので、この現象を「重紐」、即ち同声母小韻が1韻内で重なったもの、と呼ぶ。（262 頁「重紐」。執筆：遠藤光暁・秋谷裕幸）

「どう？紐を小韻だとは思っていないでしょう」

「紐は声母のことだという説明ですね。でも、仙人の説明では、重紐という用語は中国で1944年頃にできたもので、それ以前には‘重出小韻’と呼ばれていたということでした。つまり、紐が小韻の意味であることは自明なように思いますが」

「それがまっとうな感覚ね。でも、一度囚われた思い込みを修正するのは、存外に難しいものなのよ」

「そういうものですか。あ、思い込みと言えば、高2の夏ごろに、私が秦の始皇帝の時代の権量銘の臨書をしていた時に、あの書体が小篆ではなくて実は大篆だと教えてくれたことがありましたね」

「秦が度量衡の統一をした時に、それを布告するために升や重りの基準器に記した銘文のことね。一般には、秦の文字だから小篆だと思われているけど、他の資料と比較して見たら、実際には権量銘の書体は大篆だった。実はあの話、仙人が授業で話したことの受け売りなの」

「そうだったのですか？」

「それにね、前に教室で若菜が切韻残巻の臨書をしていた時に、反復記号「と」で書写年代の見当がつくという話をしたでしょう。あれも仙人の説。仙人いわく、ワシは小さい問題が好きなのだ、ということらしい」

「確かに、紐とは何かとか、反復記号の問題は大きなテーマではないですけど、かなり面白いと思います」

「あら、若菜も仙人の弟子らしくなってきたね」

「そういう葵先生も仙人の弟子ですから、小さい問題が好きなのでは？」

「まあ、そうね、言語の問題に限らないけど。最近は‘点字ブロック’が気になって仕方がない」

「え、点字ブロック？路上や駅のホームにある、黄色いブツブツのやつですか？」

「そう。どう見ても、点字なんか書いていないし、ブロックにも見えない。どうして点字ブロックと呼ばれるのか」

「うーん、確かに点字はないし、ブロックでもない。言われると気になります」

「ふふ、それじゃ、自分で調べてみなさい。いい頭の体操になるでしょう」

「まあ確かに、面白そうではあります」

「若菜は‘重紐って、重なる紐じゃないですよね’と言ったのでしょうか。私は‘点字ブロックって点字の書かれたブロックじゃないですよね’と君に問う」

「いやいや、重紐と点字ブロックは全く異なりますよ」

「それがいいのよ。一方は、合理的に名付けられたのに日本では誤解された。もう一方は、非合理的な名付けにも関わらず、誰もがその用途を正確に理解している」

「ふーむ、なるほど。理想的には、合理的に名付けられ、その通りに理解されるのが望ましいが、実態は必ずしもそうならない。それを調べることは、いろいろな専門用語を正確に理解する訓練になる、そういうことですね」

「まあ小難しく言えばそうなるけど、要は、小さい問題を考えるのは楽しい、ってこと」

## 7. 類相関

翌日、若菜は‘炭酸せんべい’を持って、仙人宅を訪れた。葵先生の有馬温泉土産で、仙人と一緒に召し上がれ、と言って渡されたものだ。仙人は例によって、ニコニコ顔で煎茶を淹れてくれた。若菜は初めて食べたが、炭酸せんべいはサッパリしていて美味だった。

前の日に話題に出た点字ブロックについて、ネットで調べ、考えた結果を茶飲み話として仙人に聞いてもらった。

「正式名称は‘視覚障害者誘導用ブロック’と言うのだそうです。‘点字ブロック’は通称です。まずは‘点字’の部分ですけど、これは実際の点字が平面の上に突起物を描いていることからの類推で、ブツブツの突起という外見上の共通点から‘点字’と呼んだのではないかと思います。実際には、点状だけでなく、線状のものもありますが、併せて点字ブロッ

クと呼び習わされています。そして、‘ブロック’ですが、土木の分野では方形のコンクリートやレンガなどのブロックを組み合わせて道路の舗装を行うことが多いので、合成ゴムやポリウレタン樹脂製のものも、舗装に使うものはブロックと呼ぶようです。結果として、駅で使われているような貼付け式のシート状の物もブロックということになりました。点字ブロックとは、要するに、‘点字のような突起物の付いた道路舗装用具’を意味するということでしょうか」

「ふむ。肝心のポイントが抜けている、と思うがな」

「は？」

「誰かが‘点字ブロック’と言い出したとして、皆が自然にその名称を受け入れたのは何故かという点だ」

「なぜか……」

「点字ブロックのブツブツは点字と外見の形状だけでなく、用途にも共通性がある。どちらも視覚障害者のためのものという連想から、点字と結びついたので。一般の点字は指先で読み取る、そして点字ブロックの突起は足裏で安全か危険かを読み取るのだらう。どちらも視覚障害者の生活に利するものという共通点があるからこそ、点字ブロックという呼び名を違和感なく受け入れたのではないかな」

「うーん、なるほど。点字という用語が、狭い意味での点字だけでなく、視覚障害者が情報を得るためのものという意味に拡大された訳ですか。そう言われると、ゲーの音も出ません。修行が足りませんでした」

「はは、言葉は面白いな。よし、茶飲み話は終わりだ。今日は類相関についてだ」

「類相関ですか。何だか数学的な名称ですね」

「実際、数学的な明快さがある。発端は周法高（しゅうほうこう、1915-1994）が1952年に発表した「三等韻重唇音反切上字研究」という論文だ。3等韻の唇音について、反切上字と被切字の関係を論じたものだ。被切字というのは反切を付けられた字、つまり韻書ならば小韻の代表字にあたる。今の用語を使って、その関係を表にすると次のようになる」

被切字 上字	A類	B類	C類
A類	○	×	×
B類	×	○	×
C類	○	○	○

「えーと、A類は重紐A類、つまり4等に配置される字ですね。そのA類が反切上字として使われるのは、A類の字に対してだけである。同様に、重紐B類（=3等の字）が反切上字として使われるのはB類の字に対してだけ。しかし、C類の字、つまり後に軽唇音化する字ですね、これに関しては制限なく、どの字に対しても反切上字として用いられる。そうい

うことですか？」

「そういうことだ。唯一の例外として、A類字である‘匹’だけは、まるでC類字のようにどの被切字にも上字として用いられる」

「これは、なかなか美しいのですが、どうしてこのような状況になるのでしょうか？」

「理由は完全には分らん。平山久雄の言うことがおおむね正しいのだろう。つまり、反切には二つの傾向がある。一つは、どの被切字に対しても、同じような性格の字を反切として用いる。もう一つは、上字が声母だけでなく、介音や時には主母音までも表して、正確な音を導きやすいようにする。具体的には、C類字を上字に用いるのは前者の傾向、A類字やB類字を用いるのは後者の傾向の表れなのではないかという訳だ」

「どうしていずれかに統一しないのですか？」

「それは切韻という韻書が前代の複数の韻書を参考にして作られたからということだろう。それらの中にはC類字を多用する韻書もあれば、A類字やB類字を多用する韻書もあった。あるいは、陸法言が修正をする際に正確な音を表せる後者の方法を用いたとか。まあ、これに関しては明確な答えはない」

「それで、周法高が見出したこの法則が何かの訳に立つのでしょうか？」

「うむ。上の図に示されたような法則というか関係を、平山久雄は‘類相関’と名付けた。そして、この類相関を音価推定に用いたのだ」

「へー、音価推定ですか？」

## 8. 音価推定における類相関の利用

「前に軽唇音化のことを話しただろう。軽唇音化の条件は何だったかな？」

「確か、拗介音と中舌・後舌の主母音を持っていることです」

「うむ。その仮説を提起したのは、趙元任(ちょうげんじん、1892-1982)という学者だ。この人はアメリカの大学でも教鞭を取り、アメリカ言語学会の会長も務めた人だ。清末・民国初の時期には天才的な学者が何人か現れるが、王国維と趙元任の二人は頭抜けている。その趙元任が1941年に発表したのが“Distinctions within Ancient Chinese”という論文だ。Yuen Ren Chao名義になっている。この論文はカールグレンの推定音価に関して、いくつかの修正を提案した。その一つが軽唇音化の条件だ。カールグレンは軽唇音化の条件を3等韻で合口であることとしたが、妥当ではなかった。そこで、軽唇音化した10個の韻(東・鍾・微・虞・廢・文・元・陽・尤・凡)について、カールグレンの音価を見てみると、微韻以外は拗介音と中舌・後舌主母音という条件で説明できることが分かったのだ」

「全部ではないのですね」

「うむ。それで、微韻については、推定音価の方を修正できないかと検討した。つまり、微韻の音価をカールグレンは、‘機 *kjɛi*’、‘帰 *kj<sup>w</sup>ɛi*’のように前舌主母音としたが、上古音との対応を考えれば、むしろ中舌の主母音で-*jəi*、-*jwəi*と再構する方が合理的ではないか。そうすれば軽唇音化の条件に齟齬がなくなると考えた」

「上古音との対応というのは？」

「例えば、未韻（微韻の去声）の‘沸・癉’はカールグレンによれば、上古音 *piwəd*、中古音 *pjwei* で、中古音では前舌主母音になるが、その声符になっている‘弗’は上古音 *piwət*、中古音 *pjuət* であるから、‘沸・癉’の中古音も中舌主母音である方が合理的だ」

「なるほど。趙元任自身の仮説以外に、微韻の主母音を中舌とする根拠がある訳ですね」

「これで、軽唇音化の条件を拗介音と中舌・後舌主母音とする趙元任の仮説はかなり説得力を持つものになった。しかし、軽唇音化しない韻については、中舌・後舌ではまずいことになる。軽唇音化しなかった韻の中で、幽韻の音価を *-iɟu* から *-jǝu* に変更することについては、カールグレン自身もこれを受け入れて、1957年のGSRでは *-jǝu* に変更した。しかし、同じく軽唇音化しなかった侵韻・蒸韻・庚韻の主母音を中舌から前舌に修正することに関しては、趙元任も積極的な根拠を見出せず、宿題として残したのだ」

「そこで類相関の出番となるのですね」

「そうだ。周法高（1952）で示された類相関によって、幽韻・侵韻・蒸韻・庚韻の唇音はすべてB類と判定され、それらの主母音も前舌と見なされた」

「つまり、それらの韻では反切上字にB類字が用いられる例があったということですね」

「そのとおりだ。これで、軽唇音化を生じたC類と、重紐をなすA類・B類とは完全に相補分布をなすことになった」

「おお、数学のように美しいですね」

「ところが、世の中はそんなに甘くない」

「ほへ？」

## 9. 之韻の音価

「平山久雄（1966）「切韻における蒸職韻と之韻の音価」は、周法高の発見した反切上字と被切字の関係を‘類相関’と名付けた上で、それを音価推定に利用した」

「でも、周法高（1952）がすでに類相関によって、主母音の性格を判定したのではないのですか？」

「厳密に言えば、周法高はすでにそれ以前の段階で、主母音の性格を決定していた。1948年に発表した「古音中的三等韻兼論古音的寫法」という論文だ。これは Paul Nagel（1941）

“Beiträge zur Rekonstruktion der 切韻 Ts‘ieh-yün-Sprache auf Grund von 陳禮 Ch‘en Li’s 切韻考 Ts‘ieh-yün-k‘au”の方法に基づいて、3等韻の主母音を整理したものだ。そこでは、ベトナム漢字音で、重紐A類の唇音が舌面音化したt系、B類がp系、そしてC類が軽唇音化を経たf系の声母で表れることを利用して、3等韻がどの類に属するかを判定し、A類の主母音を狭いe/ě、B類の主母音を広めのɛ/ě、そしてC類の主母音を中舌・後舌とした。周法高（1952）ではその結論を類相関によって確認したということだ」

「えーと、いくつか確認したいのですが、まずドイツ語の論文タイトルは‘陳禮の『切韻考』に基づく切韻の言語の再構への貢献’でいいでしょうか？」

「ふむ、いいだろう。‘Beiträge zu…’は英語の‘Contributions to…’と同じで、論文のタイトルによく用いられる表現だ。日本語ではさしずめ‘…に関する一考察’のようなニュアンスだな。著者のパウル・ナーゲルについては、この論文以外あまり知られていない」

「それと、重紐の区別ですが、周法高は主母音の違いとしていたのですか？」

「うむ。それも当時は有力な説の一つだったのだ」

「3等韻の帰属がベトナム漢字音や類相関によって決まったとなると、もう問題は残っていないように思いますが」

「周法高が確認したのは唇音だけだった。それでは唇音以外はどうかという問題が残る」

「唇音以外？」

「例えば、之韻だ。この韻には唇音声母を持つ音節がない。その場合、周法高の方法は直接には使えないだろう」

「あ、そういうことですか。でも、唇音で類相関が成り立つのならば、牙音や喉音でも成り立つのではないのでしょうか」

「うむ、平山もそう思って、調べた。結果は予想通り、牙音・喉音でも類相関が成り立つことが分かった。それで、之韻にそれを適用したところ、C類であることが確認できた」

「之韻の反切ではA類やB類の上字が用いられていなかったのですね」

「そうだが、それだけでは確定されない。C類の反切上字はA類やB類にも使われるのだから」

「あ、そうか。一体、どうやって確定したのでしょうか？」

「之韻の字が反切上字になっている例を調べた。そうしたら、C類の被切字にしか使われていなかった。C類の被切字にはC類の上字しか使用されないのだから、之韻はC類に確定した」

「なるほど。そうすると、主母音は非前舌ということになります」

「うむ。カールグレンは脂韻と之韻の韻母をどちらも[-i]と再構した。方言で区別されないの、違いを見出すことが出来なかったのだ。しかし、類相関によって、脂韻がA類とB類を含む重紐韻であるのに対して、之韻がC類であることが分かったので、之韻の方を平山(1966)では[-iǎi]とした。平山(1967)では[-iǎi]としている」

「C類だから中舌の主母音だという訳ですね」

「うむ。しかし、微韻もC類で[-iǎi]と再構されているから、韻尾のそのような差異を区別できるのかという問題は残っている」

「あちらを立てれば、こちらが立たず、ですか」

「まあ、今はこの段階だ。これよりも厄介なのは蒸韻だ」

## 10. 蒸職韻の音価

「平山久雄(1966)「切韻における蒸職韻と之韻の音価」という論文は、之韻のことにも

触れているが、むしろメインは蒸韻と職韻の音価だ」

「周法高によれば、蒸韻はB類でしたね」

「うむ、それは唇音の場合だ。平山（1966）の結論はかなり複雑だ。今は舌音や歯音を除いて、唇音・牙音・喉音の場合のみをまとめてみると、次の表のようになる。つまり、唇音はB類で決定だが、牙音と喉音についてはB類とC類が混在しているというのが平山の結論だ。ちなみに、ここでスラッシュ（//）に挟まれているのは音韻論的解釈による表記だ」

	開合	開口	合口
声母			
唇音		B類/-ieŋ, -iek/	
牙音・喉音		C類/-iɒŋ, -iɒk/	B類/-iuek/

「えーと、音韻論的解釈ではB類の介音も/-i-/なのですか？」

「そうだ。平山の音韻論的解釈では重紐の区別を声母に求めているから、介音は1種類だけだ。これについては、いろいろな問題があるので、機会を改めてやろう」

「分かりました。上の表では、牙音と喉音の開口だけがC類で、唇音がB類、そして牙喉音の合口もB類ということですね。つまり、一つの韻の中にC類とB類が混在している」

「どうだ、あまりにも複雑で、戸惑ってしまうだろう」

「本当ですね。重紐というのはA類とB類の対立だと思っていましたが、ここではB類だけがあって対立するA類がなく、なぜかC類が同居している。しかも合口は入声職韻だけなのですね」

「平山は類相関絶対主義のような思想を持っている。類相関を突き詰めた結果、上のような結論に至った訳だ。しかし、当然このモデルは複雑すぎて、納得感がない。上田正（1975）『切韻諸本反切総覧』では、牙喉音を含む蒸職韻全体を重紐韻としている。そのほとんどがB類だが、原本切韻では職韻影母開口に‘憶’と‘抑’の対立があることから、憶をA類、抑をB類としている」

「あ、重紐の対立例があるのですか？」

「重紐の、と言い切れるかどうかは定かではないが、対立はある。平山（1966）ではこの問題をスルーしていたが、平山久雄（1972）「切韻における蒸職韻開口牙喉音の音価」では、憶をC類、抑をB類とした。今日は、その根拠については詳しく説明しない。後々、興味があるようなら、関係論文を読んでくれ。ただ、論点を一つだけ言えば、牙音と喉音において、その反切上字にC類字しか用いられないという事実をどう捉えるかというのが問題だ。平山は蒸職韻の字が反切上字として使われている僅かな例を用いてC類と判定したのだが、よく見ると真に有効なものは1例しかない。そのために切韻以外の資料も利用して論を進めるのだが、それは一種の禁じ手だ。切韻の反切に見られる類相関の理論を強固にするために、原本切韻になかったと思われる増加部分を周到に排除したにもかかわらず、切韻と無関係の他の資料を利用するのはアリなのか、ということになる」

「でも、蒸職韻の牙音と喉音においては、反切上字がすべてC類であるという事実はC類説にとって、有利な材料ではないでしょうか」

「それは類相関というものの性格をどう捉えるかによる。ここに以前ワシが作成した資料がある。これは重紐韻（支・脂・祭・真・仙・宵・侵・塩韻および相配する韻）について、反切上字としてA・B類字とC類字のどちらを用いるかを声調ごとに調べたものだ。上田正（1975）で原本切韻の反切と判定されたものを利用した」

声調 上字	平声	上声	去声	入声
A・B類（唇音）	6	13	26	8
A・B類（牙喉音）	0	3	13	4
C類	88	61	43	34

「うーん、牙音・喉音を見ると、去声以外ではA類字・B類字はほとんど用いられないということですか」

「そういうことだ。つまり、蒸職韻の牙喉音で上字にC類しか用いられないからと言って、C類と判断することはできないということだ。平山が挙げた1例か2例の根拠を例外として処理した場合、蒸職韻は全て重紐韻ということになり、単純化できる」

「なるほど。たった1例でも類相関の原則に照らして有効だと見るのか、類相関にも例外はあると考えるのかという、類相関の捉え方、あるいは利用の仕方の問題ですね」

「うむ。今日は唇音・牙音・喉音について見たのだが、舌音や歯音の場合にも、介音はA類とB類のどちらと同じなのか、という問題に類相関の考え方が影響してくる。まあ、今のところは、こういうテーマがあることを知っておくだけでいいだろう。重紐の話はまた別の機会に続きをやるとして、今回は少し声母の話をしてようか」

「そう言えば、唇音の軽唇音化の話は聞きましたけど、他の声母はあまりやっていませんね」

「うむ。簡単な宿題を出しておこう。韻鏡で牙音全濁音（群母）と喉音全濁音（匣母）がそれぞれ何等に配置されるかをザッと見ておいて欲しい」

「分かりました」

こうして、若菜の新学期はスタートした。大学の授業もさることながら、やはり仙人の講義は楽しい。音韻学の用語にも徐々に慣れてきた。フランス語と朝鮮語という新たな言語にも取り組まなければならないし、忙しい年になりそうだ。